

## Exkurs

## 現代キリスト教思想における宗教と科学 —環境思想との関わりを中心に—

### <内容>

- 1 キリスト教思想の基礎—関連の方法—
- 2 キリスト教思想から見た現代
- 3 環境思想とキリスト教思想
- 4 宗教思想の意義

### <ポイント>

#### 1 キリスト教思想の基礎—関連の方法—

1. キリスト教思想とは？ そもそも思想とは？

思想とは、暗記の問題ではない。

思想は、生き方を決めているポリシーの問題（思考方法、発想法、見方）である。

思想は、個性豊かな人生にとって大切であり、かつおもしろい（はず）。

宗教は、全体的な生き方（total way of life）である。

2. 思想は、個人の発明である前に共同体の共有の思考方法である。とくに、宗教思想については、共同体の思考方法の表現に注目しなければならない

→ キリスト教では、聖書。

3. では、思想（宗教思想・キリスト教思想）に対して、いかにアプローチするのか。それについては、思想の基本構造に留意する必要がある。

↓

「関連の方法」（Paul Tillich、Method of Correlation）を参照し、一般化する。

- ・思想の成立する場：状況と伝統の相関、状況と伝統の両極構造

状況 → 宗教的問いを定式化する（哲学的作業）

キリスト教思想の現代的意義（適応性）

伝統（メッセージ） → 「問い」に対する答えという観点から、神学思想を構築する（解釈する）。

キリスト教のアイデンティティ

- ・相関の多様な形態（緊密な結合から緩やかな対応まで）

- ・状況への不適応と過剰な適応という危機

4. キリスト教思想を理解するには、それが答えようとしている問いに注目しなければならない。

5. 参考文献

・ティリッヒ 『組織神学』全三巻、新教出版社

・芦名定道 『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社

## 2 キリスト教思想から見た現代

1. 現代の状況において、キリスト教思想として注目すべき問いは何か。

答えよりも、むしろ問いの定式化にこそ留意しなければならない。

2. キリスト教思想（神学）の諸動向

「今日、北アメリカにおいてキリスト教神学を行うこと (doing of Christian theology) は、少なくとも次の5つの要因によって形づくられている。すなわち、近代、バルト主義の挑戦、エキュメニズム、多元主義、そしてポスト近代」(William C. Placher)

3. モルトマン

「今日の神学の調停」

実存論的神学（ブルトマンと歴史の問題）、超越論神学（ラーナーの人間中心的世界観の問題）、文化神学（ティリッヒと世俗的世界の宗教的解釈）、政治神学と未完の近代（解放の神学、文脈的神学、希望の神学）

4. マクフェイグ

「今日、キリスト教神学を遂行する視点」「新しい感性が要求されている」

「すべて生あるものが本来相互に依存し合っていること」「全体論的、進化論的、生態学的なヴィジョン」、「地球の運命に対する人間の責任性」「核のホロコースト」、「隠喩やモデルで思考すること」

↓

現代においてキリスト教が考慮すべき状況としての環境危機

5. 参考文献

- ・ William C. Placher (ed.), *Essentials of Christian Theology*, Westminster John Knox Press 2003
- ・ モルトマン 『二十世紀神学の展望』 渡部満訳、新教出版社
- ・ Sallie Mc Fague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress 1987
- ・ 芦名定道「現代思想とキリスト論」水垣渉・小高毅編 『キリスト論論争史』日本キリスト教団出版局、529-567頁。

## 3 環境思想とキリスト教思想

1. 環境倫理の諸問題：平等の原理、全体性の立場

cf. 生命倫理（科学技術がもたらした新しい自由をその倫理性に留意しつつ、いかに実現するか）

自由と平等の両義性！

2. 自然の生存権／世代間倫理／地球全体主義

不平等の三つの形態

3. 聖書は人間中心主義か？ 聖書の創造論の環境破壊に対する責任と関与？

↓

リン・ホワイトの問題提起と創造論を中心とした論争（1970-80年代）

4. 「地の支配」モデル（創世記1章）

27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わ

せよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

・モデル（隠喩のネットワーク）：現実理解の基本型

「地の支配」モデル：人間と自然との関係理解の基本型

#### 5. 「地の支配」とは？

- ・人間の固有の使命
- ・エデンの園の管理者・園丁
- ・「善悪の知識の木の実」を食べたことがもたらした結果としての地の搾取・破壊
- ・自然との関係をめぐる近代以前と以後における質的差異
- ・支配の王権イメージ：専制君主とイスラエルの王の理想（賢明な調停者）

#### 6. サムエル記上

イスラエルの長老は全員集まり、ラマのサムエルのもとに来て、彼に申し入れた。「あなたは既に年を取られ、息子たちはあなたの道を歩んでいません。今こそ、ほかのすべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください。」裁きを行う王を与えよとの彼らの言い分は、サムエルの目には悪と映った。（8章4～6節）

ところが、アンモン人の王ナハシュが攻めて来たのを見ると、あなたたちの神、主があなたたちの王であるにもかかわらず、『いや、王が我々の上に君臨すべきだ』とわたし（サムエル、引用者補足）に要求した。（12章12節）

#### 7. 「地の僕」モデル（創世記2章）

また土を耕す人もいなかった。

主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。

主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。（創世記2章5、7、15、19節）

#### 8. 耕す=仕える・奉仕する → 大地にへ奉仕する人間

農民として人間

土から生まれ、大地に仕え、土に帰る。

cf. 女神としての神、母なる大地ガイヤ

#### 9. モデル（現実認識の基本型）の複数性と相補性

概念体系と隠喩体系との相違、一義性と両義性

#### 10. その後の論争（1990年代以降）、終末論へ

#### 11. ヨハネ黙示録（21章）と環境

黙示文学は反環境的か？

21:1 わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。2 更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。3 そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあつて、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神とな

り、4 彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもは過ぎ去ったからである。」

12. 「もはや海もなくなった」

ケラー：海＝太古のカオス、神話的表象 → 自然神・女神

ロッシング：海＝ローマ帝国の経済的・政治的支配、社会政治的表象

cf. ディープ・エコロジーと社会的エコロジー

13. 共生のヴィジョンとしての終末論

モデルはヴィジョンによってイメージ化され、感性に作用する（感動を生み出す）。

イザヤ 11 章

6 狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。7 牛も熊も共に草をはみ／その子らは共に伏し／獅子も牛もひとしく干し草を食らう。8 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ／幼子は蝮の巣に手を入れる。9 わたしの聖なる山においては／何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように／大地は主を知る知識で満たされる。

14. 歴史の完成・目標としての終末論

モデルの統合＝「神－人間－自然」の関係性のヴィジョン

15. 参考文献

・ 芦名定道 『自然神学再考——近代世界とキリスト教』 晃洋書房

・ Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans*, Harvard University Press 2000.

Theodore Hiebert, "The Human Vocation: Origins and Transformations in Christian Traditions." (pp.135-154)

Catherin Keller, "No More Sea: The Lost Chaos of the Eschaton." (pp.183-203)

Barbara R. Rossing, "River of Life in God's New Jerusalem: An Eschatological Vision for Earth's Future." (pp.205-224)

・ 並木浩一 『旧約聖書における文化と人間』 教文館

#### 4 宗教思想の意義

1. 希望のネットワーク（希望の組織化）の必要性：絶望を超えて進むために。

ビジョンを描くこと、ネットワークづくり、真実を語ること、学ぶこと、愛すること

2. 環境危機へ対処するには、何が必要か。

新しい科学技術

しかし、これで十分か？

3. 人間は何によって動くのか？ 人間を理屈で説得することの限界（もちろん、理屈はきわめて大切であるが）

「環境に優しく」ということの大切さは理屈で分かっている、実践につながらないという現実。

4. 感性の欠如

5. 宗教的ヴィジョンは、理屈だけでなく、感性に訴える。

哲学的・倫理的な環境理論では動かない人間たちを、動かす可能性

6. 宗教思想は、宗教的表現形式（ヴィジョンを描くこと）に注目することによって、環境思想の理屈と感性とを媒介する機能を担いうる。

7. 参考文献

- ・ドネラ・H・メドウズ他 『限界を超えて』ダイヤモンド社
- ・高木仁三郎 『市民科学者として生きる』岩波新書